

平成 29 年度 海外 SD 研修（台湾・台北）参加報告書①

報告者：畑中みどり（大阪学院大学 国際センター）

海外 SD 研修（台湾・台北）に参加して

大阪学院大学の国際センターでの業務を通して、これまでも台湾の大学の関係者や学生と接する機会が頻りにあったが、今回の研修を通してさらに台湾の大学事情について深く学ぶことができた。また、台湾が直面している少子化問題は、まさに私たちの直近の問題であり、以前から様々な取り組みをしている台湾の大学から学ぶべきことは多いと感じた。また、今回訪問した大学すべてが他にはない特徴を持ち、魅力的な大学作りに取り組んでいるように感じた。しかし、私が今回一番印象に残っているのは、日本の大学を退学して台湾の大学に進学した日本人学生、あるいは日本の高校を卒業してそのまま台湾の大学に進学している日本人学生が多くいるという事実だった。私は、大学生だった数十年前に、日本の大学にいても自分が目指しているような自分にはなれないという気持ちからアメリカの大学に編入した。この何十年の間にも政府から様々な施策が発表され、日本の大学を取り巻く環境が多少なりとも変わったのかもしれないが、日本人の学生が進学したいと思える大学になれない限り、海外から多くの学生を呼び込むことも難しいのではないかと思う。今後、少子化が進むことは確実で、大学の存続が危ぶまれているが、本当に危機感を持って取り組むのは今だと痛切に感じた。今回の研修で感じたこと、学んだことを基盤に、今後自分が所属する大学のみならず、日本の大学教育にどう貢献できるかをしっかりと考えていきたいと思っている。

平成 29 年度 海外 SD 研修（台湾・台北）参加報告書②

報告者：松井健太郎（大阪経済大学 教学・国際部 国際交流課）

「大学コンソーシアム大阪 海外 SD 研修（台湾・台北）に参加して」

海外 SD 研修（台湾・台北）では、他大学の職員の方々と一緒に「台北大阪高等教育シンポジウム」に参加し、現地の大学を視察させていただきました。

特にシンポジウム中のディスカッションは英語で実施され、自分自身の思いや意見を的確に相手に伝え、グループの意見をまとめることの難しさを強く感じました。研修を通して、日本と台湾それぞれの大学が抱える課題等について議論し、意見交換ができたことは貴重な経験となりました。

また、現地の大学を視察した際、多くの台湾の学生や中国語を学ぶために留学している日本人学生がスチューデント・アンバサダーとして私達の訪問をあたたく迎えてくれました。その際、学生達が英語、中国語ときには日本語を使いながら堂々と所属大学の紹介をし、私達とコミュニケーションをとる生き生きとした姿に驚きました。そして、そのような学生達を育成する台湾の大学や環境、教職員の方々の取り組みから学ぶべきことは数多くあるのではないかと感じました。また、自分自身や所属大学の取り組みに関して、「世界との差」を肌で感じ危機感を抱きました。今後は、より一層広い視野でそれぞれの課題を分析し、改善のために具体的な取り組みを実行に移していく必要があると思っています。

最後になりましたが、台湾渡航前の事前研修から細やかな指導とご準備をしてくださいました、追手門学院大学の塩川様、コンソーシアム大阪事務局の山本局長、西本様には心より感謝申し上げます。

平成 29 年度 海外 SD 研修（台湾・台北）参加報告書③

報告者：逢坂 敏裕（大阪工業大学 教務部教務課）

海外SD研修に参加して

社会人となって初めての海外研修とあって、気合を入れて臨みましたが、台湾人の基礎力の高さに圧倒されるばかりの4日間でした。中でも、現地の教職員のプレゼンテーション能力もさることながら、学生の学びへの熱意に感服しました。彼らの考えにある前提が、日本のそれとは大きく違いました。英語は使わなければならない必須のツールであるとの認識が広く浸透している一方、日本では英語は使うことができればベター程度にしか考えていません。また、大学の各施設で打合せや実習中の学生から、学問の理解をより深めようとする強い姿勢を感じ取ることができました。この学びの環境の違いが、日本の大学ではなく台湾の大学を選択する日本人学生の増加につながり、まさに大学淘汰時代が進んでいることを実感しました。

本研修を通じて視野が広がった感覚を得て、日本に戻り通常業務に当たっていると、再び視野が狭くなりつつあります。学生により質の高い教育環境を提供し、台湾に勝る魅力的な大学へと変革するには、教員の専門性や教育力だけでなく事務職員の言語能力、ホスピタリティ、コーディネーション能力などスキルの底上げが不可欠で、台湾の事務職員に追いつき追い越す必要性を感じます。英語力不足の私は、その第一歩として、早速オンライン英語学習を開始しました。各々が危機感を持ち、学内や国内の諸問題だけでなく、国外との競争を意識して取り組む職場にしていきたいと思います。

以上

平成 29 年度 海外 SD 研修（台湾・台北）参加報告書④

報告者：廣嶋千聡（大阪工業大学 学生部学生課）

私は今回参加させていただいた海外SD研修を通して、大学や教育機関等の教職員・学生のホスピタリティの高さに感動しました。4つの大学、2つの教育機関を訪問しましたが、どこに行っても、温かく歓迎してくださり、「台湾のアピールポイント」を熱く語って下さいました。また、大学の紹介や案内等でサポートしていただいた学生スタッフがボランティアであることにただただ驚くばかりでした。この研修会を開催するにあたり、夜遅くまで準備していたと教職員の方々からお聞きしました。学生スタッフだけでなく、現地の学生の英語スキルの高さにも驚きました。台湾では幼児教育が盛んで、コミュニケーションを重視したカリキュラムが組まれているそうです。日本でも英語教育が重要と言われていますが、まだまだ課題が山積みだと痛感しました。

台湾の大学生のスキルを日本の大学生に今すぐに求めるのは現実的に厳しいと思いますが、日本のグローバル教育の進め方を見直さなければ、世界諸国に置いて行かれる一方です。日頃、あまり英語を利用することはないですが、私自身この研修で英語スキルの必要性を痛感しましたので、この機会に勉強したいと思います。また、学生にも英語の必要性を伝えていきたいと思います。

平成 29 年度 海外 SD 研修（台湾・台北）参加報告書⑤

報告者：藤倉 満志（学校法人常翔学園 総務部 職員研修課長）

二泊三日という短い滞在であったが、台湾の方々の、歓待と能力に驚かされた。もちろん、政府・台湾教育部およびその外郭団体である FICHET が関係したイベントでもあり、会場の大学は“エース級”が選定されていることであろうが、訪問させていただいた台湾教育部および FICHET のスタッフ、大学の教員・事務職員・現地学生・日本人留学生等の関係者のホスピタリティと能力（特に語学力）が強烈に印象に残った。

台湾では日本以上に少子化が進行しているようだ。大学進学率もはるかに日本を上回っており、これ以上の進学率の向上は望めないと思われる。まさに大学淘汰の時代に直面しており、生き残りをかけて国際化戦略を進めている。台湾の方々のホスピタリティと語学力は、国民固有の特性・能力でもあるだろうが、国際化への強い希求・意志の現れではないだろうか。

日本の大学も同様の状況に置かれているはずだが、我々の危機感は薄く、台湾と比べると改革のスピードは遅いように感じる。国際化だけが唯一の解ではないだろうが、将来に向けた施策の大きな柱になることは間違いないと感じた。

平成 29 年度 海外 SD 研修（台湾・台北）参加報告書⑥

報告者：浅田晋太郎（大阪女学院大学）

大学があり、自国出身の学生さんや留学生の皆さん、そして教員と職員がいる。台湾の大学であたりまえのことに気づかされました。印象的だったのは、お世話をしてくれた日本からの留学生を含めた学生の皆さんの表情、どこかに緊張は残しているけれども何かに打ち込んでいるとき特有の。そして実践大学を始めとする教員はもとより職員の方々が醸し出すこれも気持ちの良い雰囲気。共通しているのは、所属大学に対する熱い想い、平たく言えば自分の大学が好きであること。おそらくは自分自身との関係を含めて、それぞれの役割に対する認識とどこかでビジネスライクを超えている相互の関係から生まれているのでしょう。

本学では来春から本格的な英語と中国語の併修プログラムがスタートします。それが国際化に対応する施策となるとしても、想いを込めて「自大学の教育課程の先にあるものを意識しつつ」「一人ひとりの学生の成長を願う」原点の大切さを実感しました。皆様ありがとうございました。

平成 29 年度 海外 SD 研修（台湾・台北）参加報告書⑦

報告者：高橋 亜由美

（学長室（国際担当） 国際教育グループ 国際教育支援チーム）

◇研修名

2017年度 海外SD研修

◇業務実施主体とプログラム名

大学コンソーシアム大阪 海外SD研修（台湾・台北）

◇研修場所

事前研修：大学コンソーシアム大阪 キャンパスポート大阪

研修：台湾・台北

◇研修の感想

本研修では、学長団と共に参加できた側面や、職員同士のつながりを作ることができたこと、また台湾の教育やそれぞれの大学での取り組みを実感できたことがこのプログラムでの貴重な体験だった。

具体的には、台湾教育省にて国の政策について、直接お話を聞くことができたこと、似たような問題について共有できたことは大変有意義だった。大学における英語での受講開講数が多いことや、国際的な評価を大学の評価とすることについては、先進的な取り組みを政策から読み取ることができた。

また、台湾大阪高等教育会議においては、台湾の教育事情や大学ランキングについての議論、オンライン学習についての議論を聞くことができた。その後の台湾と日本の大学職員による議論では、10名ほどのグループに分かれ、多様な学生の受入について議論した。個別の大学の問題とグッドプラクティスを共有できた。

本研修でとても印象に残ったものの一つに” Student Ambassador” が挙げられる。大学により役割が異なるようだが、本研修の主なホスト校である実践大学では、” 海外からの来客対応” をはじめ、本研修のほぼ全ての実務を担っていた。大学の紹介ムービーや大学案内含む広報物、昼食のお弁当、おやつまで、” 学生による” 活動が目立ったとともに、彼らの仕事ぶりには感銘を受けた。学生のパワーを感じるとともに、その活動をハンドリングを担当する職員の熱意も感じた。

最後にこの研修を実施して下さったSD研修準備委員の塩川先生、コンソーシアム大阪の西本さま、山本さまには大変感謝している。

以上

報告者：葛西崇文（青森中央学院大学）

台湾 SD 研修に参加して

今回の SD 研修では、戦略的に展開されている台湾の高等教育に終始圧倒された。台湾教育部は、激しい少子化を打破し、優れた人材を世界に送り出す教育国家としての価値を高める政策に注力していた。

このような政策は、台湾の各大学が他大学との差別化を図り、その大学で学ぶべき理由を明示する広報活動に結びついていた。しかも、拝見した 4 つの大学は、自国のみならず、世界から学生を獲得するため戦略的に行動しており、台湾の少子化事情だけでなく、学生獲得競争がすでに国際化していることを認識し、その国際化した市場で自大学がどう生き残るのかをビジョンとして明確化していることを窺わせた。

翻って我が国について考えると、各大学は台湾と同様の状況に置かれていながら、それを十分に認識せず、種々の活動も日本国内を向いていることが多いように思う。世界の中で持続可能な教育を展開するビジョンを有している日本の大学は、少ないのではないか。

持続可能で、世界のどこにも無い、その大学だけの特徴ある教育を行うことは日本でも可能なはずである。そのためには、ビジョンの明確化だけでなく、その大学に属する教職員一人ひとりが持つ強みと志向を明確にし、研修を通じてそれらを伸長させ、力を結集して困難な時代を乗り越えなければならない。これまでも学内の職員像策定やそれに基づく研修を行ってきたが、今後は世界を広く見据え、より高い目標に向かって、努力していきたい。



平成 29 年度 海外 SD 研修（台湾・台北）参加報告書⑨

報告者：小宅 直樹

（国際基督教大学学務部学部事務グループ 日本語教育プログラム事務室）

大学コンソーシアム大阪海外 SD 研修（台湾・台北）に参加して

2017 年 10 月 25 日～28 日の期間、大学コンソーシアム大阪海外 SD 研修（台湾・台北）に参加した。台湾教育省や現地大学への訪問、台北大阪高等教育シンポジウムにおいて、台湾側の大学関係者との交流やディスカッション等を行った。

最初この研修のお話を頂いた時に、台北大阪高等教育シンポジウムにおいて自大学の先進的な取組について英語で紹介する役の打診を頂いた。正直に言うと、当初はその発表のみに焦点を置いてしまっていたことで、台湾の高等教育や訪問先大学に関しての下調べは不十分なまま参加してしまった。そのこともあってか、台湾の訪問先大学の視察、特に実践大学では大きな衝撃を受けた。

日本の大学を選ばずに台湾で学ぶ日本人学生が少なからずいて、高度に中国語を操り、しかも英語も日本語も話せるトリリンガルの学生が多いこと、視察に来た我々をとても温かく迎え入れ、学内を案内してくれる中で自分が通っている大学が好きで誇りを持っていることを自然と感じられること、そしてそれが「やらされている感」が一切ない、ボランティアで行っている活動だったこと、また、台湾の学生も同等のホスピタリティーや英語を駆使する高い語学能力を備えていること等々、すべてが自大学を含めたほとんどの日本の大学生よりも遥か上を行っているであろうことを痛感し、大きな衝撃を受けた。

大学のグローバル化ということが叫ばれて久しいが、自分たちの国のすぐ近くにあって、しかも少子高齢化という同じ社会構造を抱えている台湾で、これほどレベルの高い学生を引き寄せている事実があることを、日本の大学関係者はどれくらい知っているのだろう。グローバル化というとすぐに欧米の大学の例を引き合いに出して、アジア諸国にはなかなか目が行っていない状況があるのではないか。そのようなことが続けば、早晚学生にとって日本の大学は魅力が薄いと映ってしまい、学生に選ばれることがなくなってしまうのではないか。

この表現力に乏しい文章でどれだけこの研修で受けた衝撃が伝わるのか不明だが、なるべく多くの大学職員がもっと広い視野を持って物事を見て行く必要があるし、このような研修で学んだことや感じたことを自大学でどのように還元していくかが非常に重要だと感じた研修だった。

平成 29 年度 海外 SD 研修（台湾・台北）参加報告書⑩

報告者：堀 亜樹（桃山学院大学 国際センター事務課 課長）

「SD 研修で得られたもの」

SD 研修で最も印象に残っているのは、台湾からの参加者とのディスカッションである。

日本・台湾の双方が奨学金や多様な学習機会を提供するなど、同様の取り組みを通じて留学生の成長を促していると感じた。その中で、留学生には、学びの成果を大学に還元してもらう必要がある、という考えが示されたのだが、大学側が留学生への支援を継続して行くためにも必要な視点であると感じた。この他にも欧米圏からの留学生を受け入れるための方策について説明があり、世界基準で「選ばれる大学」になるために、広い視野を持つことの重要性を痛感した。

職員同士のディスカッションは初の試みだとお伺いしていたが、活発な意見が出されたため時間が非常に短く感じた。

この他、特筆すべきは、台湾側の歓待である。特に実践大学の学生達の心のこもったもてなしには脱帽した。今後、台湾から訪問団が来られた際には、今回私達が受けた歓待への感謝の気持ちを表したい。

今回の SD 研修で得られたものはこの報告書では書ききれないほどであるが、これからも得られた知識と交流を活かしながらより一層業務に勤しんでいきたい。

大学コンソーシアム大阪の皆様、参加者の皆様、誠にありがとうございました。

以 上

（順不同、敬称略）